



四 進化 四

秋が終わりを迎え、冬が到来した。海子は、今、地元の島の砂浜にいた。紅葉病に罹患していることが判明した後、あんなに憧れた都会の大学を中退して、下宿を引き払うと、地元に戻って来ていた。どうせなら、地元で最後を迎えたかったからだ。それは、父や母の希望でもあった。自宅で療養生活を過ごすうちに、名前のお通り、無性に、海が見たくなった。

目の前の砂浜は、中心市街地に近い港から、マッチ箱のようなフェリーに乗り、約二十分で到着できる島の海水浴場にあった。もちろん、港からも海は見える。だけど、海子は、何かに導かれるように、自宅から自転車でフェリー乗り場に向い、島行きフェリーに乗り込んだ。島に到着すると、歩いて、砂浜に来たのだった。

この砂浜のある海水浴場に来たのは、何年ぶりだろうか。確か、小学生の頃、子供会のデイキャンプで来て以来だ。皮膚をこがすような太陽の陽射しの中、友達と一緒に、海で泳いだり、浮き輪に揺られたり、ビーチボールをぶつけあったりした。遊ぶことに疲れて、お腹が空くと、日陰の松林の中で、バーベキューを食べ、定番の、スイカ割りをした。

なんと楽しく、懐かしい思い出だ。だけど、自分が死んでしまうと、この記憶も思い出されることなく消えてしまうのか、と思うと悲しくなった。あの時、一緒に遊んだ同級生たちが、今は、どこにいるのかさえ知らない。それぞれが、進学や就職で地元を離れていたし、地元に住んでいても、生活習慣が異なると、隣の人でさえ、顔を合わせて、会話をすることはなかった。互いに、すれ違いの人生を送っているのだ。

海子は靴を脱いだ。確か、小学生の頃は、水着に着替えて、海に飛び込んだのだった。季節は冬。当然、海で泳いでいる人たちはいない。あの頃のように、水着に着替えて海の中で泳ぐには寒い、恥ずかしい。そう、いつのまにか、恥ずかしいという服を身につけてしまったのだ。

だから、大学から自宅に戻って来た時に、近所の人に出会った際にも、「あら、大学はお休み？」と尋ねられても、手袋を脱いで赤くなった手を見せて、「実は、紅葉病なんです」とは答えられなかった。自分が、そんな病気に罹患しているとは人に知られたくなかったし、自分から伝える勇気もなかった。いや、勇気というんじゃなくて、他人から慰めや憐れみを受けたくなかっただけ、なのかもしれない。

海子は、靴を脱ぎ、靴下も脱いで、裸足となった。足は既に、全体に紅葉していた。担当医から説明があったように、紅葉病は、体の先端から発症していた。幸運なことに、顔だけは、まだ、薄緑色だった。紅葉が体全身にまで行き及んで、その赤色が茶色く変色した時に、死を迎えるら

しい。まさに、もみじや銀杏の木々が、鮮やかな赤や黄色に染まりながら、やがて、茶けて、枯葉となって、地面に落ちる風景と同じだった。

海子は思う。ヒトは、食糧不足難等を克服するために、葉緑素を体内に宿し、光合成ができるようになった。その一方で、紅葉病となって命を落とす者も現れた。これは進化なのか。何事にもプラスの面とマイナスの面があることは理解できるし、ヒトという種族としては、プラスマイナスゼロなのかもしれない。だけど、なぜ、自分がマイナスの面を引き受けなければならないのかが、今でも、納得がいかない。また、家族も同様の気持ちだった。

海子は、海水に足を浸けた。波は、一定のリズムで、沖から打ち寄せては、引いていく。その沖には、海子をこの島に連れて来てくれた小さなフェリーが、それこそマッチ箱が漂うかのように航行していた。その波が、今は、海子の足元の砂も一緒に海に連れて行く。足元の砂が掘れていく。だけど、波は、海子だけは、海には連れて行かない。残される海子。

このまま、波に、海に連れ去って欲しい。海子は、思わず、波の中に飛び込んでしまいたい衝動に突き動かされた。ふと、足先を見た。海水に浸かっているためか、足は赤くは見えなかった。波にさらされる足を一步後ろに引いた。白い砂の上に自分の足が見えた。赤かった足の色が、海水に流されたかのように薄くなっていた。

「まさか」

海子は両手の手袋を脱いだ。両手は、真っ赤からやや薄茶色に変色しかかっていた。一番先に変色し始めたのは手だったからだ。海子は四つん這いになると、両手を打ち寄せる波の水際に置いた。海水が両手を覆う。そして、寄せては返す波。その単調な有様を真剣な眼差しで見つめる海子。

最初、海水のレンズを通してみる両手は赤かった。だが、次第に、その赤が薄くなり、元の皮膚の色の薄緑色になっていくように見えた。海水が皮膚の赤色を洗っているのか。期待が半分、そんなことはありえない、このまま自分は死ぬんだという絶望が、半分ずつであった。人は、期待が大きければ大きいほど、その期待が意に添わなかった時の反動が大きく、心に大きな打撃を与えることを知っているからこそ、期待をあえてしなくなるのだ。

だけど、揺らめく海水を通じて見ると、赤に侵されていた両手は確実に、元の自然な薄緑色に回帰しているように思えた。

「まだよ。まだよ」

海子は、両手を海水から途中で上げてしまうと、皮膚から赤色が溶けだすのが止まってしまうのではないかと恐れた。海水はそんなに冷たくなくても、吹き晒す西風は強かった。体から体温がどんどん奪われていく。

「もうだめ。我慢できない」

海子は両手を海水から持ち上げた。その冷え切った両手を見た。その両手の皮膚の色は、紅葉病に侵される前の薄緑色だった。年齢相応の薄緑色だった。その両手を太陽にかざす。まぎれもなく、両手からは赤色が抜けて、自然な肌色の薄緑色になっていた。海子の両目からは、無色透明のしずくが落ちた。

この出来事は、一大ニュースとして、世界中に、瞬時に広がった。紅葉病に侵された人々は、我先にと海の中に入った。どういう効果かなのかはわからないものの、体の表面からは赤色や黄色は消え、体が枯れることはなくなった。通常の緑色に戻ったのだった。

これまで、紅葉病の治療に当たってきた医師たちも、海水の効果は認めざるを得なかった。もちろん、紅葉病が治ったとしても、年齢相応に、若葉が濃い緑になり、やがて、枯れていく老化現象はあった。しかし、紅葉病のような、急激な老化ではなかった。

海に体をさらすという治療法は、科学的な根拠がない民間療法ではあったことから、世界政府は、海水がもたらす紅葉病への効果を研究したものの、その治癒する理由は究明できなかった。しかしながら、現実として、紅葉病が治っていることから、この治療法を認めざるを得なかったし、推奨さえした。これも、進化の一種だと判断した。ヒトには、ヒトでありながら、ヒトにはわからない力を備えているのだと認識せざるを得なかった。

こうして、紅葉病を克服したヒトは、引き続き、自らが光合成をすることで、地球の環境等を維持・継続させるとともに、他の生物とも共存していった。平穏な時がこのまま続き、ヒトはこれまで以上に繁栄していくと思われていた矢先のことだった。